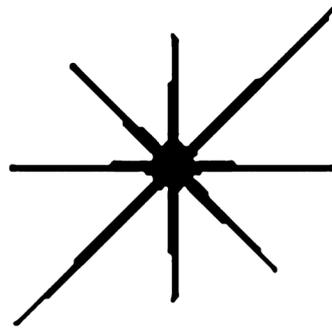


# コメット通信 32

[23年3月号特別付録]



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

# 歌物語あるいは浴槽

—旅のみやげ4

野村喜和夫

その朝、私はひどい二日酔いととも目覚ました。頭はがらがんするし、胸はむかむかする。直前に見た夢も思い出せない。目覚まし時計をみると午前9時過ぎで、いつもより2時間近くも寝坊してしまった。これでは、この時間とこの体調では、とても会社に行けないな。もう少し横になっていようか。しかしいったん覚めた目は、なかなか元に戻らない。そこでとりあえず私は、起きてしまおうと決心した。ふらふらしながらベッドを離れ、キッチンに行ってコップ一杯の水を飲み、それから洗面所に行って顔を洗おうとしたが、鏡に映った浴室の様子がどこかいつもと違う。振り返ってみて、私は仰天した。お湯を張った浴槽のなかに、なんと女が全裸で横たわっているではないか。まさか。ねぼけまなこをこすってもう一度見たが、まだ取れきれない目脂を透かして、たしかに女が全裸で横たわっている。どうやら眠っているようだ。

しかるべく口むろから

あわあわあわあわ

声になりそこねたことばとことばになりそこねた声

とが裂け

咲き

ワッ、キーン

ワッ、キーン

まさかまさか。あわてて私は洗面所の外に出た。いつの間に妻が戻ってきたのだろう。実はひと月ほど前に、妻は家を出てしまっていたのだ。私からの目立ったドメスティック・バイオレンスなどはなかったにもかかわらず、いや、多少はあったかもしれないが、それにモラル・ハラスメント、家事分担の拒否、常習的飲酒。それやこれやで、いわゆる愛想を尽かして。あるいは、たんに、ほかに男が出来たということなのかもしれない。いや、それらすべてが複合し、作用しあった結果、妻はハンマー投げのハンマーのように、この家の外に飛び出ていったのだ。

ともあれ、私は喜んだ。そうか、戻ってきてくれたのか。ハンマーではなく、ブーメランだった妻に、さて、どうやって謝ろうか、関係を修繕しようか。それとも、何事もなかったかのように、さりげなく声をかけるべきか。思案しながら洗面所に戻り、浴室の浴槽に向かって後ろから何か言葉を発しようとして、しかし、どうも髪型とかが妻の雰囲気ではない。浴槽にさらに近づき、正面からみた眠る女の顔は、じっさい、妻とはあきらかにちがう顔だった。年齢もアラフォー（40歳前後）の妻よりはいくらか若く見える。

はじき出されるように、私はふたたび洗面所の外に出た。そうか、家を間違えたのだ。私は大型のマンションに住んでいる。昨夜、というか夜半過ぎ、おそらく泥酔して帰宅したものだから、自宅のつもりでうっかり隣のドアを開けようとして、ところが、たまたま鍵がかかっていなかったのだろう、開いてしまい、そのまま中に入って、そのまま朝を迎えてしまったのかもしれない。あれは、あの浴

槽の女は隣の奥さんだ。私はまさか、彼女に気づかれぬまま、居間の片隅、ソファと壁の隙間にでも寝ていたのか。しかし、さっき目が覚めたのはあきらかにベッドの上だった。とすると、夜のあいだに私は奥さんに見つかって、そのあと私たちは何をしたのだろう。たまたま彼女の夫は単身赴任中で、30代半ばの女盛りのからだをもてあましていた彼女が、家を間違えて入ってきた私を、せっかくだからと誘惑して、ことに及んだのではあるまいか。

泥酔して、なおかつ、男性機能を発揮できるものであるのかどうか、深くは問わないことにしよう。あるいは、実はたいして酔っていなかったのかもしれない。あるいは、しばらく酔いを覚ましてから、しらじらと夜が明ける頃にことに及んだのかもしれない。そうだ、そうに違いない。実を言えば私も、隣の奥さんに懸想するようところがなかったわけではない。それが実を結んだのだ。生業のほかに私は詩を書くことをひそかな本分としてみずからに課しているが、つまり詩人だが、そういう人種は、北原白秋の昔から、隣の人妻とは恋の過ちを引き起こしやすい。そうすると私は、彼女としばらくこの家で暮らすことになるのか、少なくとも彼女の夫が戻ってくるまでは。それとも隣の私の家に移って、妻の代わりを彼女がすることになるのだろうか。しかし待て、彼女には子供がいるはずだ、小学校高学年の女の子と、小学校低学年の男の子と。彼らはどこにいるのか、もう学校に行っているのか、などと考えながら、しかし、居間に行ったらあたりを見回すと、もちろんマンションだから、間取りは画一的な2LDKだが、ソファはくたびれた感じの茶色いフェイクレザー製、壁には私の好きなジョアン・ミロの版画がかかっている、まぎれもなく私の家ではないか。

居間のテーブルには飲み残しのワイン、食い散らしたチーズの残骸などが見える。私は混乱した。そうか、自分はまだ夢のなかにいるのだ。よくあることではないか。いったん目が覚めて、それでも起きたくなくてぐずぐずしていると、二度寝というのか、また眠りに入ってしまい、夢のなかでうつつのつづき、つまり起床後のあれこれをしたりする。そのどこかで浴室に行き、私の何かしら潜在的な欲望のあらわれとして、浴槽に全裸の女を発見したのだ。したがって女は、幾分か私の妻でもあり、また幾分か隣の人妻でもあり、またさらに幾分かアイドルタレントのK・Aに似た私の初恋の女の子でもあり、要するにそれらを複合して出現したところの、夢の女Xなのだ。

ところが、どうもそうではないらしい。コーヒーを湧かすためにコーヒーメーカーをセットしてお目覚めというものは、そして何よりも、胸がむかむかして、とてもパンをオーブントースターに入れる気にはなれないということは、つまりもう目が覚めているという証拠であろうから。

脳天むらさき

おお

崩壊ちちと

半球の右のへりにきざすまえに

脳天むらさき

私はもう一度、洗面所から浴室へと赴いた。浴槽にたたえられているのは、お湯ではなく水だ。時間の経過とともにお湯が冷めてしまったのかもしれない。いずれにしても、その水を張った浴槽のなかに、相変わらず女が全裸で横たわっている。これが唯一にして無二の現実である。

女は眼を閉じ、眠っているようだ。おいおい、風邪を引いてしまうよ。言いかけて、あらためて顔を確認してみると、しかし妻でもないし、隣の奥さんでもない。そんなばかな。私はいちだんと混乱した。同時にしかし、眼を引き込まれた。美しかったからだ。いや、それをいうなら、妻も隣の奥さ

んもそこそこに美しい。私がいま眼にしているのは、それとは別の、裸体と浴槽との相乗効果が醸し出す美しさ、とでも言えばいいのだろうか。顔立ちだけではない。女はおそらく、入浴するために髪を巻き上げたのだろう、そのほつれ毛がうなじにかかって、それも美しい。眼を首の下へとパンしていくと、乳房はゆたかで、ぼんやりとうす赤く膨れた乳首は思わずさわりたくなる、いや、吸いつきたくなる。そのあたりがちょうど吃水線になっていた。水面下の、腹部のくびれから腰の丸みにかけてのラインもすばらしい。30代と思われる肢体はさすがにとびきりみずみずしくはないが、それでも熟れきって艶やかという趣はある。腿は閉じられているので、陰毛がそよぐその奥まではみえないが、ひっくるめて、なんとも悩ましい肢体なのである。

だからといって、すぐさま欲情が私に発生したわけではない。繰り返すが、女は眼を閉じ、眠っているようだ。それで私は、「冗談はやめろよ」と、水から出ている肩を揺り動かしてみた。もし目を覚ましたら、とにかく事情を訊いてみるつもりだった。どうしてこんなところにいるのか。私とはどういう関係にあるのか。しかし女は目を覚まさない。どころか、よくみると呼吸していない。つまり死んでいるのだ。なるほど、唇は紫色で、血の気を失ってはいる。

私は思わず引いた。ぞっとしたと言ってもいいかもしれない。こみ上げてくるものがあるので、あわててトイレに入って、便器に顔を突っ込んで吐いた。いや、これは宿酔による嘔吐なのだ。そう思おうとした。じっさい、吐いたことで少し気分がすっきりし、トイレを出た。そして何がどうなっているのか、あらためて事態を冷静に見つめてみることにした。ここは私の自宅で、二日酔いとはいえ自分は確実に目を覚まし、一日を始めようとしている。なのに、浴室の浴槽には女が全裸で死んでいる。肌にはまだいくらか体温が残っていて、死後数時間しか経っていない感じだった。

にしても、ありえないことだ。浴槽に女の死体！ シュルレアリスムのコラージュじゃあるまいし、まだしも浴槽に蛇とか鱈とかなら話はわかる。だがもし浴槽に女の死体——それが唯一の現実だとすると、事の起こりは昨夜にちがいない。そこでようやく思い出した。夕刻、都心の会社を退けたあと、電車に乗って私の住む郊外の駅で降り、改札口を出たところで、ばったり大学時代の友人と出くわして、卒業以来、同窓会で会ったきりの仲なので、なつかしいなあ、いま何してる、とにかく飲もう、となって、駅近くの居酒屋に入ったのだった。それから数時間、最初は定石通り、近況を報告し合うことから始まって、学生時代の思い出に移行した。サークルの飲み会の二次会か三次会で歓楽街のサパークラブに入ったら、法外な金額をむしり取られたこと。すっからかんになって、タクシーにも乗れず、未明の街を果てしもなくさまよったこと。たぶんそのときではなかったか、とある交番から、巡査の不在をいいことに、立てかけてあった防犯キャンペーンの看板を盗み出したのは。ああ、かくも懐かしき青春。やがて二人とも次第に酔ってきて、氣勢を上げ、下半身の話題へとさらに移行した。友人曰く、交接するときはやはりぴたっと体と体が重なり合うのがいいよな。私曰く、いや、結合部だけ密着して、あとは離れていたほうがもっと興奮するよ。双方なかなか譲らないでいると、ひとりで飲んで隣の席の女性が、とびきり若くはないがまだおばさんというほどでもない女が、

「どうでもいいけど、あんたたち、そんな猥談やめなよ、迷惑だよ」とクレームをつけてきて、言われてみればその通りなので、

「すいません」と私たちはあやまり、でも女は、なおも絡むように身を乗り出して、

「欲求不満なのね、そんな話をするなんて」と、しなさえ作る風情なのだ。どうやら水商売系のようなだった。

「そ、そうなんです、欲求不満なんです」と私は思わず悪ノリしてしまい、「ご一緒にどうですか」と口を滑らせてしまった。すると女は、待ってましたとばかりに、私たちの席にずりずりと肢体を移

し…… そうだ、そうに違いない。

こうして私たちはその女と意気投合し、さらに家で酒盛りしようと、三人で私のこのマンションの部屋に雪崩れ込んだのだ。間違いない。私はもう40をいくつか過ぎていたが、旧友と飲んでいると、すでに述べたように、なんだか青春が戻ってきたような気がして、久しぶりにはちゃめちな飲み方をしてしまったのだろう。部屋に雪崩れ込んで、冷蔵庫から缶ビールとチーズを取り出して、ワインも開けて。そう、さっき眼にした、居間のテーブルの上の飲み残しのワイン、食い散らしたチーズの残骸、などの意味がようやくわかったのだ。とそこまではなんとなく覚えているのだが、そのさきの記憶が飛んでいる。何があったのだろう。そもそも浴槽の女は、昨夜のその女なのであるか。私はその女の顔をよく覚えていないが、浴槽の女の方がより美人のような気もする。あるいは、死を経て、一種凄絶な美形がかりそめ現出しているのであろうか。いずれにしても、男好きのするいい体つきをしていて、私に下心があったのはたしかだった。

ぶるぶるぶるぶる

誰でもない

誰かの

膀胱と通じ合う

泥の鳥のはばたきのなかを

私は居間に戻り、スマートフォンを手にして、昨夜一緒に飲んだ旧友に電話した。名刺を交換していたのである。一度目は出なかったもので、しつこく二度三度とコールするうちに、ようやく出た。

「やあ、きのうはどうも」

「こちらこそ。でもいま取り込み中なんだ。あとでこっちから電話するよ」

「うん、でも、ひとつだけ、あれから俺たちどうなったんだっけ」

「えっ、覚えてないのか」

「どうもそうらしい」

「おいおい、どうなったもなにも、おまえがあんまりあの女にご執心なものだから、俺は気を利かして帰ってやったんじゃないか。そうか、言い寄ったけど、女に逃げられて、やけ酒を喰らったな」

もしその通りなら、どんなに心穏やかになることか。しかし私はそれ以上のことは友人に伝えず、電話を切った。ひょっとすると自分は、言い寄っただけではなく、その場で無理にも欲望を成就しようとして、しかし女に抵抗され、なにかの弾みで女を死なせてしまったのではあるまいか。そう考えると、体からみるみる体温が引いていった。でも、そうだとすると、重い女体をわざわざ浴槽まで運んでお湯に沈めたりするだろうか。むしろ女は、私の欲望を受け入れ（泥酔しても男性機能を発揮できるものであるかどうか、という問題はここでも有効だが）、しかるのち、朝、ひとりで風呂に入っているうちに、心臓発作か何かを起こして絶命したのではないか。まだ30代だとは思いますが、持病があったかもしれないし、突然死の可能性だってないとはいえないだろう。たしかめてみよう、と私は思った。外傷らしきものがあれば殺人、なければ突然死だ、と。

私はふたたび洗面所から浴室に入った。そして、「えっ」とまた眼を剥いた。浴槽に女などいない。まるで浴槽のタブラ・ラサが起こったかのように、ホーローの、どこまでも白いスペースがあるだけだ。水も張られていない。

なんだ、ハハハハ、そういうことか。体に体温が戻ってきた。幻覚だよ幻覚。日頃の欲求不満

に加えてアルコールの大量摂取で、私は浴槽に女を幻視したのだ。そう思って、ひとまずほっとした。現実というのは、あれこれと余計な妄想や要らぬ心配を経て、いつもこういうありふれた情景に帰結するものだ。私は急に快活になり、そのうえ気まぐれを起こして、多少遅刻でも会社に行こうと支度を始めた。二日酔いはひどいけれど、鼻歌まで出てくる。浴槽に女の死体なんかいない。まして自分は殺してなんかいない。たぶん女は、友人が帰ったあと、私の尋常とは思えない情欲を察知して、酒盛りの居間から、たとえばトイレに行くふりをしてこっそり逃げたのだろう。

しばらくして、しかし幻覚だとわかると、それはそれでまたべつの心配をしなければならなくなった。こんな幻覚が起こるほど自分の脳はアルコールにやられているのか、いずれ病院に行かなければなるまい、と。

### よろこべ明日も脳だ

すべすべに

つるつるに

ひかひかに

すかすかに

てらてらに

脳の

外まで

脳だ

考えられるもう一つの可能性は、浴槽に女がいたことはたしかだが、あれは幽霊だったということだ。幽霊だから忽然とあらわれ、忽然と消える。荒唐無稽に近いが、だからこそ、話としては面白い。しかしあいにく、私は幽霊を信じていない。幽霊は、それを信じていない者にはなかなか見えないものなのだとすることを、テレビか何かで耳にした気がする。

などと考えながら、私はマンションを出て、とりあえず会社に向かった。日はすでにかなり高い。二日酔いのせい、駅までの道の街路樹、ユリノキの新緑が余計にまぶしく感じられる。ところが、どこか変だ。いつもより駅に向かう人が少ないような気がする。いつも目にする駅近くの内科皮膚科クリニックには休診の札がかかっている。そこでようやく、そうだきょうは休日ではないか、だからこそ昨夜はあんなに羽目を外したのだと気づき、さらに解放されたような気分になって、踵を返した。ラララ、ヒューマンステップス。そんなコンテンポラリー・ダンスの公演もあったな。複数のダンサーが一行に並んで、両手をびったり腰につけ、何はともあれ、びゅんと飛ぶのである。無表情に、びゅん、びゅんと。そんな想起のうちにマンションまで戻り、エントランス脇のごみ置き場にふと目をやると、もし自分が殺人者だったとしても、あそこに死体を遺棄するわけにはいかないだろうなと、笑いながら思った。

それにしても長い朝だ。長い長い朝だ。休日ということなら、久しぶりに部屋の片付けでもするか。洗濯物も溜まっているし。昼にはもう二日酔いも治っているだろうから、陶酔のカルボナーラでも作ろう。以前はよく作って、妻と一緒に食べたものだ。鍋にたっぷりのお湯を沸かし、塩ひとつまみを入れたあと、スパゲティの束を捻るようにして投入する。茹で上がるあいだ、卵をボウルで溶きほぐし、たっぷり黒胡椒と粉チーズをまぶす。牛乳や生クリームは入れない。それがローマ風であり、我が家でもそれを踏襲する。つぎに、フライパンでベーコンをカリカリになるまで炒めて、そこに白ワイ

ンを注ぎ、焦げた部分を溶かすのだ。なんという料理法だったかな。もちろん、ついでにグラスにも注ぎ、それを飲みながら作るので、陶酔のカルボナーラなのである。

いちばんむずかしいのは、卵への火の通し加減だ。スパゲティが茹で上がる直前に、フライパンに卵を入れて掻き回すのだが、あまり火を通し過ぎると卵がパサパサになってしまうし、かといって生卵状態でもよくない。茹で上がったスパゲティの熱もあるので、よくよく注意しないと、ねっとりクリーム状の半熟状態にはならないのだ。

昼食のあとはゆったりとソファに腰を落ち着け、久しぶりにブラームスの4番でも聴こうか。充実した休日になりそうだ。その前に、念のためにと、浴室を覗いてみることにした。洗面所に入って、そこから浴室のほうへとおそるおそる首を伸ばす――

すると、なんということだ、浴槽に女が見える、全裸で水に浸かっている女が見える。私は一瞬、頭が吹っ飛んだようになった。そして、覗くんじゃなかったと、無意味な後悔をした。浴室のことなど忘れていれば、陶酔のカルボナーラぐらいは作れただろうに。

しかし、もう遅い。浴槽には死んだ女が横たわっている。それはまるで、癌患者が、癌ではないと自分に言い聞かせつつ医師の診断を仰ぐと、やはり癌だった、みたいな。ああ、だめだ、万事休すだ。私はその場にへたり込んでしまった。幻覚なんかじゃない、それをいうなら浴槽のタブラ・ラサこそ一時の幻覚であり、浴槽で女が死んでいるというのは、まぎれもない、そしてくつがえしようのないただ一つの現実なのだ。

と同時に、自分が乱暴しようとして抵抗され、ふとした弾みに彼女を死にいたらしめたのだという可能性が、なぜかほかの可能性を押しつけて絶対化された。あらゆる可能性を数え上げるならば、たとえばの話、私が泥酔して眠っている間に、友人の方が女を殺して浴槽に沈めたということだって、ないわけではないだろう。さっきの電話ではずっとぼけていたが、ひどい友人だ。レイプ殺人のあげくに、私に罪をなすりつけようとしているとは。さらに言えば、友人も女もおとなしく帰って、私は私で寝室に行き熟睡している間に、誰かが外で、たとえばマンションの廊下で別の女を殺して、たまたま私の2LDKに忍び込み（私は鍵をかけ忘れた）、その女を全裸にして浴槽に沈めて、この家の住人の私の犯罪に見せかけたという可能性だって、蓋然性としては99.9%ないが、この広い宇宙のことだ、100%ないとは言い切れないだろう。

というようなことを十数秒のあいだ考えて、消しようのない現実には私は戻った。ただ、謎は残されている。つまり私が女を死にいたらしめたのだとして、なぜ私は彼女をわざわざ浴槽に沈めたりしたのかということだ。それは大変な力仕事のように思えるが、覚えていない。その前に、衣服はどこで剥ぎ取ったのだろう。信じられないことだが、私はそのときはじめて衣服という問題に行き当たった。とりあえず浴室から、洗面所の脱衣用の籠を見てみたが、私がここ数日の間に脱ぎ捨てた下着やバスタオルの類があるだけである。ということは、私はたぶん居間で女を脱がしたのだ。女はたしか、昔風のボディコンシャスな白っぽいワンピースを着ていた。それは覚えている。居間に行けば、床のどこかに、そのワンピースやらキャミソールやらが、もしもレイプの途中であったならば、びりびりに引き裂かれた状態で見つかるだろう。それはわざわざ確かめに行く必要もないように思われた。むしろ、朝起きてからいまに至るまで、さんざん居間を行ったり来たりしていたのに、そのどこかに散乱した女の衣服にまるで気づかなかったということが、われながら不思議だった。

しかしいづれにしても、彼女の死によって全ては崩壊する。これまで築いてきた私のささやかなキャリアも、まだ若干夢見る余地が残されている詩人としての将来も、それから親兄弟との絆も、全ては崩壊する。私と妻の間には、子供がいなかった。それだけが唯一の救いとなるだろう。

私は浴室へへたり込んだまま、遅ればせの絶望の叫びを上げた。それは反響し、増幅され、私の脳内にも行き渡った。だが、自己保存への本能的な動きというのは不思議なものだ。叫びの残響が消えやらぬうちに、早くも私は立ち上がり、行動を起こしていた。時間は待つてはくれないということ、このときほど深く強烈に理解したことはない。長い朝が一気に収縮する。逃げ。いまや肢体は死体なのだ。硬直が始まり、死斑が出る。そしてどんどん腐敗していく。外に運び出すことは無理だろう。重いし、人目もあるし、遺棄の場所にも困るし。私は、いつだったか読んだ、殺人者が死体の処理に困り、結局死体を抱えて一晩中歩き回るといふ小説を思い出していた。記憶がたしかなら、作中の語り手はその死体である。性別は男だ。生前の彼には恋人がいたが、その恋人が別の誰かを好きになってしまい、祭の夜、二人の共謀によって殺されてしまう。死体は、殺人者たちによって運ばれてゆきながら、「ほら、そんなところに私を捨てたら、人に見つかってしまうよ」と、まさかの親切心を起こしながらつぶやく。あるいは、「ほら、そんなところに私を捨てたら、犬に見つかってしまうよ」。その間にも、夜空には花火がドーンと打ち上がって、そのつど稲妻のように、眼を開けたままの死体の顔を照らし出すのである。

なので、ここで、この浴室内で処分しなければならない。私は玄関へと急ぎ、靴を履いた。近くのホームセンターに行って電動ノコギリと黒いビニール袋を買おう。そうして死体をバラバラにして袋につめ、しかるのち、レンタカーを借りて、どこか山の奥にでも遺棄すれば、あるいは発見されずに済むかもしれない。

だがそのまえに、と私は思った。俗に言う悪魔のささやきである。あの死せる女を抱くというのはどうだろう。欲望はたぶん、まだ成就されていないのだ。

越えてゆくのだ  
うしろむきにうるうる  
うるうる  
性欲を析出しながら  
灌木の茂みへ  
草のプラトールへ  
薄いくつもの境界を越えてゆくのだ

私は玄関に立ち尽くした。そしてまた思い出していた。昨夜のことではない。ずっと以前の、中学校に入って間もない頃のある出来事が、ありありと脳裏に甦ってきたのだ。生家のどこか片隅に捨てられてあった雑誌の山から、一枚のヌード写真を見つけたことがあった。私は近くに誰もいないことを確認して、そのページに見入った。一糸まとわぬ美女が浴槽に身を沈めている。眼は閉じて、口は半開きに開かれ、眠っているようにみえる。首から下は、美しくふくらんだ乳房の、ちょうど乳首のあたりまで湯が張られ、そのさらに下はというと、わずかに太腿にタオルが絡みついている、それが都合よく陰部を隠しているが、あとは腹部から足の先まで、豊かで重そうな女体のうねりがそっくりみえている。それだけでも、性に目覚めつつある中学生にとっては十分に刺激的だが、写真の下の文章を読むと、この美女は実は殺されているのであって、より詳しくは、入浴中に何者かに電気を通され感電死したのであって（もちろんフィクションである、このグラビアページはいわば、ミステリー仕立ての写真小説になっていたのだ）、私はどうやら、そのことにこそ格別の興奮をおぼえたようなのだ。女は死んでいる。びりびりと電気を通されて殺されたのだ。大人になった未来の私が殺し

たのかもしれない。想像は果てしもなく広がり、気がつくとは私は、生まれて初めての射精でブリーフの前を汚しているのだった。

多くの怪異の由来と同じように、そのヌード写真の記憶があまりにも深く私の生の基底に根づいてしまったために、それはいつか現実化される機会を狙っていたのではないだろうか。子供の頃感染した水疱瘡のウイルスが、そのまま皮膚の深くに潜り込み、数十年ののち、帯状疱疹となってあらわれ出るように。私をして生かしめよ。そう記憶に命じられて、私は無意識のままに女を殺し、全裸にして、浴槽まで運んだのかもしれない。記憶は現実となり、未来の私はいまの私となったのだ。

**世界の終わりは  
きっと  
キュンキュンとねじくれてゆく草  
モノクロに輝く虹**

なんだかわけがわからなくなってきた。とにかく抱いてみよう。いずれもう破滅が決まったような身なのだ。見境がなくなっても当然だろう。

私は玄関で踵を返し、靴を脱いだ。息をしていないということのをぞけば、浴槽の女はまだ生きているも同然である。ネクロフィリア、死者と生者との結婚。そういえば、女の血の気の失せた紫色の唇が、しかし妙に扇情的だった。しかも、死んだ女の膺は締まりが抜群だということ、なにかの本で読んだ記憶がある。このさいだ、それを試してみるのも悪くない。待ってくれないはずの時間が、今度は異様に水飴のように伸びてゆくのを感じられた。長い長い朝だ。私は廊下で上着を脱ぎ、ズボンを脱ぎ、さらには素っ裸になって、水の精ニンフを追う半獣神さながら、ペニスを方向舵のように突き立てつつ、浴室に突進していった。

執筆者について――

野村喜和夫（のむらきわお） 1951年生まれ。詩人、批評家。小社刊行の主な詩集には、『風の配分』（1999年、高見順賞）、『[よろこべ午後も脳だ](#)』（2016年）、批評には、『オルフェウスの主題』（2008年）、『[パラタクシス詩学](#)』（共著、2021年）、『[シュルレアリスムへの旅](#)』（2022年）などがある。